

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 9 月 4 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370963

研究課題名(和文) ガリシアの農村を対象とした共同体の人類学的研究：非同一性に根ざした共同性の探究

研究課題名(英文) Anthropological Study of Communities through the Case of Rural Villages in Galicia, Spain: An Exploration of Solidarity Based upon Diversity

研究代表者

竹中 宏子 (Takenaka, Hiroko)

早稲田大学・人間科学学術院・准教授

研究者番号：30376967

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は外部に対して極めて閉鎖的にみえるスペイン・ガリシアの農村共同体について、祭り「私は村の出身(Son d'Aldea)」と「外部」の視点をもつその主催者たちに着目しながら、彼らと既存の共同体との間につくられる共同性を考察したものである。人類学的な調査を通して、この祭りが経済効果を狙うだけのイベントとは異なり、「内」と「外」の直接的な接触と協力によって成る、開放的な祭りであることを捉えた。また主催者たちは、祭りの前後期間における一時的な住民であり、地域の象徴を創造する重要な意味を有していることを明らかにし、村と関係が薄い人々による新たな農村の共同性のあり方を考察した。

研究成果の概要(英文)：This study exams the solidarity created between insiders and outsiders of agrarian village communities in Galicia, in general very closed to outside of the community, through an ethnography of the festival "Son d'Aldea" (means "I'm from village") and its principal organizers with a distinctive perspective from that of villagers. Based upon our anthropological research, we can consider this festival as quite opened one which consists of the relationship and collaboration between insiders and outsiders, different from that of which is just expecting an economical effect. We also can analyze that the principal organizers of the festival are the temporal habitants who construct symbolic elements representing the local identity. It can be seen new solidarity of agrarian villages made by the people without a thin relation to the locality.

研究分野：文化人類学

キーワード：共同性 共同体 農村 祭り ガリシア

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 文化人類学においては、共同体に関する厚い研究蓄積があることは言うまでもない。現在、所謂「伝統的な共同体」にあてはまらない集まりも人類学で扱われるようになり、共同体の概念は再検討されてきた。こうした公共性をテーマにした人類学的な研究の多くは都市に着目するが、報告者はそれまで調査対象としてきたスペイン農村の実態を現代の共同体の一つの形として捉え、共同体概念も再検討したいと考えた。

(2) 報告者のそれまでの調査地において近年始まった祭りは、かつての農村生活を見直し、農村を立て直す動きである。従って、この祭りを通した主催者同士の関係性と農村共同体の維持や刷新の様相を見ることは、現代社会を席卷する都市の論理とは異なる考えや規範を捉えることに繋がると考えた。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、一見、外部に対して極めて閉鎖的にみえるスペイン・ガリシアの農村共同体内部の多元的な社会関係や実践を明らかにすること、そして農村で最近行われ始めた祭り(「私は村の出身(Son d'Aldea)」)に着目し、祭りの主催者間と既存の共同体との間につくられる共同性を考察し、その開放性と閉鎖性を把握することを目的としている。

(2) 祭りの主催者の中にはニューカマーやUターン者、住人ではないが常に当該地に関わる者がいる。彼らは村を生活の場や自分の生き甲斐との場として選んだ人々である。彼らを、村の論理とは異なる価値観

をもつが故に周縁に位置づけられた人々と理論的に捉え、彼らが既存の場に接合していく過程を明らかにし、現代農村社会における共同性や共同体について議論する。

## 3. 研究の方法

本研究は、祭りとそれに関わる人々に関する人類学的なフィールドワークを中心的な方法とする。祭り主催者であるエコ・チーズ業者、劇団員、人類学研究者に関する参与観察と聞き取り調査を実施し、祭りにも参加しながら彼らの関わり方を調査する。

## 4. 研究成果

### (1) 祭り「私は村の出身」の概要

この祭りは2011年にアルバ村のエコ・チーズ業者の発案で開始されて以来、毎年9月の第一週目の金・土曜日に行われている(第1回目と2回目は土曜日のみ)。2016年で6回目の開催になる。開催2日間の内、金曜日は夕方から夜にかけて、「村」「田舎」「農村」などをキーワードに討論会が開かれ、土曜日は、祭全体のメインイベントで、寸劇を見ながら村とその周辺を3~4時間徒歩で周遊する「劇ツアー(Roteiro Teatral)」とその後の昼食会が行われる。また土曜日の夕方からは、屋外の会場で、車輪ころがしやパチンコなどの伝統的な玩具で自由に遊ぶ場が設置され、夜になると子供向けのお話し会や手品ショー、大人向けのコンサートが開かれる。これらに参加するには、討論会には10ユーロ、「劇ツアー」と食事会には25ユーロのチケットを購入しなければならない。現在では毎年300人以上の参加者があり、2016年は過去最高の延べ500人の参加者を記録した。

この祭りの特徴は、討論会も劇も全て地元の少数言語「ガリシア語」で行われる点、討論会の登壇者やオーガナイザー、そして「劇ツアー」の出演役者たちは基本的に無償で役割を担っている点である。また、農村や田舎の過去を評価する要素が、そこに見られる点も特徴的だ。特に「劇ツアー」は村の「自然」や古い建物を背景に、昔の慣習や生業を8つの寸劇として紹介するものだが、これらの劇には、ツアー参加者が意味を見出せるようにある程度のストーリー性が用意されている。例えば2016年の場合、あるカップルが婚前にどのようにお互いの家族に婚約者を紹介していたかを演じる場面と結婚式の場面があり、ツアー参加者は、結婚式の会場に向かうという設定で歩き続け、途中で様々なテーマで演じられる残り6つの場面（寸劇）に出くわす、といった具合になっている。「劇ツアー」で想定される時代は20世紀前半であり、そこには嘗て第1次産業中心で成り立っていた地元経済、「田舎」の倫理や規範、農村の学校教育や生活における中央権力（「スペイン」）の影響が、時には皮肉を込めて、時には過去を美化するように表現されている。

寸劇および参加者を導くツアーガイドとなる役者は全て素人で、演劇サークルに属する者もいれば、アルバ村やその周辺の村の住人で、その時だけ寸劇に参加する者もいる。特に昔の生業を紹介する場面では、村の住民が起用され、彼らが作業しながらお喋りをするシーンが多く設定されている。

また、会場には2日間、土地の伝統的な生業と関わる物品が売られるテントが並ぶが、それらの出店の中には祭りのテーマに合いそうな店に頼んで出店してもらったも

のも含まれている（例えば藁や葦などの植物繊維を使った手作りの籠を売る店、羊毛の手工芸品を売る店、飼っている牛から取った生クリームを練り込んだクッキーを売る店、など）。このような店は、手作業および「エコ」が基本で、「伝統的なもの＝エコロジックなもの」という考えが見て取れる。

祭りの準備は年が明けたころから徐々に始められる。会場の設定や寸劇の舞台設定のサポートは村の住民が、近隣組織の仕事の一環として行い、寸劇はシナリオ作りから役作りまで数人の劇団関係者が中心になって、素人の役者を先導する。討論会もテーマとパネラーが、地元出身（厳密には周辺の町の出身者）の人類学研究者によって選ばれ、組織される。7月下旬のポスター原稿の入稿までには全てのプログラムが大よそ整うが、特に劇ツアーに関しては、ほぼ前日まで改善が重ねられる。

## (2) 祭りの主催者の概要と考察

エコ・チーズ業者 Arqueixal は、50代男性のAを中心とし、その妻と息子、2人の従業員で営まれる小さな企業である。祭り「私は村の出身」においても社名の Arqueixal は目にするが、実際に祭りの運営に関わっているのはAのみである。アルバ村出身で、現在もそこに住み、農村の生活に価値を見出そうとするAの思想や想い入れは、彼の経営方針にも反映されている。それはすなわち「伝統的な製法」を用いたチーズやヨーグルトの生産である。この態度は祭りの中にも見て取れる。

Aは高学歴者ではなく、村の外で働いた経験も長くはないが、アルバ村および近隣の村々からは常にアイディアマンとして見

なされてきた。今は亡き彼の父や姉も新規的な考えを常に持ち、アイデアを実現していたという。A は家業を継ぎ、発展させたのである。彼は、地元をあまり離れたことがない「土着的なパイオニア」と言うことができよう。

「私は村の出身者」で A は、祭りの全体をまとめる中心的な存在となるが、実際の役割は主に、様々な芸術グループへの出演依頼、出店の出店依頼、「私は村の出身」限定のグッズ販売の企画、近隣組織のメンバーとの会場づくり、雇用や会計である。

#### 劇団員

祭りの「劇ツアー」出演者には、素人の劇団に属している者も含まれている。「劇ツアー」を監督するのは 40 代男性の B で、中等教育（12～16 才）機関の国語教師である。彼はアルバ村から 5 キロほど離れたパラス市の出身だが、パラス市も観光産業が盛んになる前はほぼ農村だったことから、大枠で地元出身者に分類できる。30 代でガリシア州内の他県で専任の職を得るまで、パラスで両親と共に暮らしていた。

B はスペインの少数言語であるガリシア語を守る立場を貫き、どこで上演する場合でも言語（脚本）は全てガリシア語で話される。このような B の態度と、祭り「私は村の出身者」自体の思想に共感した団員が、役者として、また裏方として祭りを支えている。彼らのほとんどはパラス市以外の村や都市の出身者で、居住地も様ざまである。特にパラス市出身で、現在もパラスに住んでいる C は、文学の修士課程を終えた女性（30 代）で、脚本や演劇指導の面で B の右腕として活躍する。また、全員で 100 人近くになる役者たちを組織するのが難しい

「劇ツアー」では、アルバ村から 70 キロほど離れた都市に住む D（50 代、男性）が、役者として貢献するばかりでなく、性格が異なる役者や祭り関係者をつなく調整役として力を発揮する。

アルバ村または周辺の村の住人ではない、こうした村の外部の視点を有した劇団員たちは、演技することのみならず、「昔のガリシア」を再現することに意義を感じ、誇りに思っている。彼らは、祭りのメインイベントとなる「劇ツアー」の成功を目指して、毎年改善案を議論し、よりよい「劇ツアー」および祭りそのものの運営の仕方を模索する姿勢が強い。その行為から、「私は村の出身者」を単なる村祭りに終わらせるのではなく、対外的な印象を意識し、出演者や参加者の権利や平等性を考慮していることが見て取れる。所謂「市民」や「都市」の価値観を村で行われる祭りにも持ち込んでいると考えられる。

#### 人類学研究者

祭り「私は村の出身者」には、ほぼ毎年、2 人の人類学研究者が関わっている。1 人は、パラス行政区内の村出身者を親に持つ E（40 代、男性）で、他の都市に居住し、大学で教鞭を取っている。彼の専門は応用人類学または観光人類学で、「私は村の出身者」も新しい村の観光のあり方として論文で発表したことがある。もう 1 人の F（40 代、男性）はアルバ村近くの町の出身で、今もそこに住んでいる。教育人類学を専門とし、現在、E ラーニング形式の大学で教鞭を取っている。祭り「私は村の出身者」で彼らは、金曜日の討論会を組織する。この討論会は、「劇ツアー」などで楽しむだけでなく、「田舎の将来も皆で考えたい」という A の

発案から始められた。

討論会では言語をある程度「科学的」に操ることが要求されるが、住民が直面する農業を続けていくことの困難さ、悩みなどが率直にぶつけられる場でもある。もう少し言えば、討論会は、住民たちがパネラーから学び、公の場で経験を表現し、悩みや不安を共有する機会である。したがって人類学研究者たちは、異なる「知」や「経験」をつなげる努力をする討論会を通して、異なる領域の橋渡しの役割を果たしていると考えることができよう。

以上 はそれぞれ異なる興味や思い入れから、祭り「私は村の出身者」に関わっている。それでも彼らの間に共通点が見られる。アルバ村の住人であるのはのみだが、ももガリシア語を共通言語とし、ガリシア州内の出身者で住人である点は共通している。また、「田舎」「農村」「伝統的（歴史的）なもの」に価値を見出し、「アルバ村」というよりも、「ガリシア」の「農村全体」の将来に危機感を抱いている点も共通している。さらに（A）は村にはない斬新さを、は都市的な価値観を、そしては科学的な知見を村に持ち込み、外部に開放する契機を作りだしていると考えられる。

### (3) 村の住民と祭りの主催者の関係性

「私は村の出身者」がもたらす開放性  
アルバ村はガリシア州のほぼ中心に位置するパラス市（行政区）の中の教会区である。人口は約70人とされるが、実際の住人は30人ほどで、人口のほとんどが70才以上の高齢者である。ガリシアにある他の村々の例から漏れず、アルバ村も普段は閑

散としているが、村祭りや夏休みの時期になると、都市部からの一時的な住人で人口が増える。一時的な住人のほとんどが、アルバ村出身者かその家族であるが、「私は村の出身者」は、それとは異なる他者も集まるときである。

「私は村の出身者」は、外から観光客などと呼ぶために行政主導で行われるイベントなどとは異なり、アルバ村の近隣組織も積極的に協力することから、また、住民も寸劇の役者として参加することから、「内」と「外」の直接的な接触あるいは協力によって成り立ち、開放的な祭りとなすことができる。

#### 村の住人と祭りの主催者

村の住人と祭りの主催者（ ）の関係性を見ていくと、生活空間をほとんど共有しないことから、日常的には住民と主催者たちは関わり合っていない（図1）。しかし、主催者同士は何らかの関係性を保っている。

はアルバ村住民ではあるが、既に述べた通り、「典型的な」住民ではなく、どちらかという村の周縁に置かれ、外部と常に交流をもった存在と位置づけられるだろう。

それに対して祭りの時とその前後期間には住民と日常的には祭り主催者は大きく関わり合い、アルバ村を代表するような象徴性すら帯びるようになる（図2）。親戚ではないにせよ、彼らもアルバ村の一時的な住民と認めることができ、しかもアルバ村のイメージを創造・維持・発信する能動的で村の存続にとって重要な、一時的な住民なのである。

「私は村の出身者」を通じたガリシア農村共同体の実態

アルバ村が高齢者人口の占める割合の多い過疎集落であることと考えると、一時的な住民の存在は大きい。これまでの調査から、祭り「私は村の出身者」は経済効果を狙った観光目的とは少し質を異にするもので、あくまで自分たちの楽しみや信念のために行っている「内向き」の祭りであることがわかった。そこに働く「内向き」の求心力に引きつけられた外部者が、さらにこのつながりに加わっていく。これが、この土地や住民と外部者が関係性を構築するプロセスだと言える。重要なことは、祭りで表現されるものは、アルバ村やその周辺のみ限定される象徴ではなく、ガリシア全体をテーマとしている点である。だからこそ、ガリシア語を通して、アルバ村やパラス市から見たら外部者である人々も容易につながることができるのだろう。

これまで夏の一時的な住民としては、その土地の出身者あるいは親戚であり、彼らによって新たな祭りやイベントが創られ、村を刷新していく例はヨーロッパでも報告されている(Boissevain, J.(ed.) 1992 *Revitalizing European Rituals*, Routledge)。本研究はこれらの報告に近いものではあるが、当該の村と関係が薄い人々による新たな共同性のあり方とその特徴をある程度まで捉えられたと考える。

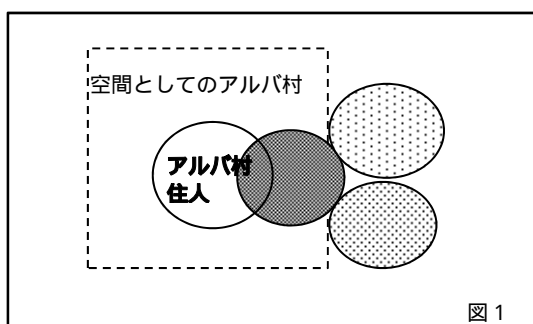


図1

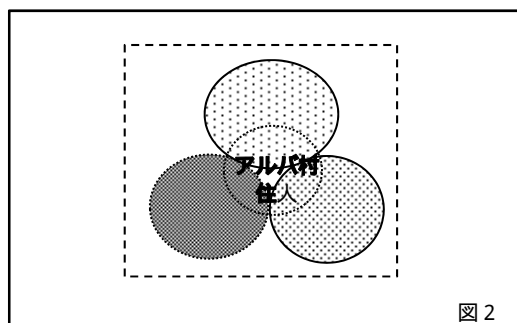


図2

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

竹中宏子、キリスト教巡礼におけるホスピタリティの現在：サンティアゴ巡礼の巡礼宿とオスピタレロに着目した人類学的研究、観光学評論 3(1)、査読有、2015、17-33

〔図書〕(計2件)

竹中宏子、個人が開くソシアルの地平：スペインガリシアの地域文化コーディネーターの事例から、森明子編『ヨーロッパ人類学の視座-ソシアルなるものを問い直す』、世界思想社、2014年、161-189

竹中宏子、遺産を担う変わり者：スペイン・ガリシアの古城をめぐるM氏とアソシエーション、飯田卓編『文明史のなかの文化遺産』、臨川書店、2017年

〔その他〕

書評

竹中宏子、場所との関係で立ち上がる「巡礼者」像 [土井清美 著『途上と目的地-スペイン・サンティアゴ徒歩巡礼路 旅の民族誌』]、観光学評論 5(1)、2017年、141-144

国際シンポジウム

衰退する農村地域の再編を考える：新たな農村文化創造の日欧比較、2016年11月26日(於：早稲田大学3号館601教室)

関連URL：

<http://warchssimp2016.web.fc2.com/index.html>

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

竹中 宏子 (TAKENAKA Hiroko)

早稲田大学人間科学学術院・准教授

研究者番号：26370963